

# 〈たましい〉が存在する場所

——「混沌の闇世界」という領域への気づき——

伊 田 広 行

## 要旨

〈スピリチュアル・シングル主義〉の主張に対して、シングル単位論はよくわかるが〈スピリチュアリティ〉というと、驚かれたり、よくわからないという反応をいただいたりすることがある。〈たましい〉や〈スピリチュアリティ〉というと、とたんに、「そんなものは科学的でない」、「存在するはずがない」というのが大方の見方であろう。ここは、〈スピ・シン主義〉の説得力に関わる点なので、本稿ではその作業の一つとして、〈たましい〉を考えざるを得ない領域があることを示す<sup>1)</sup>。論理的な、目に見える世界は、実は、不確定な、底の抜けた世界と繋がっている。そうした「混沌の闇世界」というべき領域を考えることをスピリチュアルな視点と私は呼ぶ。

キーワード：混沌の闇世界、目盛りの間、存在

## 目 次

- 1 表層世界以外への覚醒へ——「AならばB」の飛躍、目盛りの間の虚無
- 2 表層世界と「混沌の闇世界」
- 3 それは「ある」のか、存在を証明できるのか

### 1 表層世界以外への覚醒へ——「AならばB」の飛躍、目盛りの間の虚無

多くの「AならばB」( $A \Rightarrow B$ )には、論理的かつ必然にみえて実は飛躍というものがあり、その間には虚無というかブラックホールのようなものがあるというような、

---

1) なお、〈たましい〉〈スピリチュアリティ〉そのものの説明については、近著『〈スピリチュアル・シングル主義〉』([2003c])を参照していただきたい。

「この通常社会の底が抜けている感覚」, 「日常生活で見えない, 理性の向こうの世界があるという感覚」をいかに伝えられるかが, 〈スピリチュアル・シングル主義〉の主張を受け入れてもらえるかどうかの分かれ目のひとつだとおもう。そんなことを感じてこなかった人に, あなたが信じていた自明な世界の足もと自体は「浮いている」「底が抜けている」って感覚を, なかなかわかってもらうのは至難の業なのだが, いくつかの角度から説明してみよう。

### 無限に続く問い

例えば, なぜ, あなたはボタンを押せばお風呂に入れるのか? なぜ蛇口をひねれば飲める水が出てきて, ガスや電気が家庭で手に入るのか。それが科学の力だ, 日本経済が成功したからと, 答える人がいる。そこで終わる人がいるが, そこで終われるか?

というのは, 問いはどんどん続くからだ。例えば, なぜ日本経済が成功した成果を, 他の人でなく, あなたが手に入れられるのか。あなたが作ったのではないのに。日本人だからというかもしれないが, 地球人ともいえるし, 国とか民族という概念も怪しい。それだけではない。なぜ電気やガスというものがあるのか。1000年前には利用できなかったし, 今も地球上で利用できない人がいるし, そもそも, 誰がガスや電気を作ったのか。それが自然法則だとか, それが運命だといって思考を止められる人がいる。でも本当にそこで終われるか?

なぜその運命や成果はあなたに降りかかったのか。つまり, なぜあなたは100年前に生まれなかったのか。なぜインドネシアに生まれなかったのか。自然法則というものを学校で習ったが, それが本当に正しいといえるか。先進国アメリカでも, 「神が人間を創った」ということを教えている学校があるじゃないか。ひょっとしたら, 私だけが「真の人間」で, まわりの人や歴史という情報はすべて作り物かもしれない。みんな私をだましているのかもしれない。あるいは, なぜ原子があり, その構造として電子があり, それが流れて, エネルギーが運搬できるのか。なぜ元素にはあまのり種類があるのか<sup>2)</sup>。なぜ元素の種類が1000個でないのか。なぜ自然界にはさまざま

---

2) 宇宙の最初には水素やヘリウムしかなかったという。しかし, まったくの合理的必然として, 巨大なエネルギーによる核融合によって, 多様な元素ができ, そこから生命が生まれた。そのことは合理的だが, 金Agという重い元素ができて, それがあつたよ

な法則があるのか。なぜ万有引力があるのか。なぜシマウマや麒麟や亀やミトコンドリアがあるのか。なぜ、ヒヤシンスやタツノオトシゴはあの形であの色なのか。そういうことと「風呂には入れること」は繋がっている。つまり、底は抜けている。

### 不思議の上に生きている

何を言いたいのか？ それは、私たちが「謎・不思議・未規定」の上に生きているということ。科学が発達していないから分かっていないだけで、科学が解明すれば、不思議はないと考える人がいるが、そうではない。もちろん科学で明らかになっていくことはたくさんある。だから安易な「神秘」とか「神が創った論」にはもちろん僕は否定的だ<sup>3)</sup>。だが、科学がいくら発達しても、宇宙の最初が「無」である<sup>4)</sup>という

---

うに光り輝き美しいということや、生命がそうした元素が組み合わせでできたということとは、やはり神秘であるとしかいいようがない。

- 3) 多くの神秘主義のインチキさをまず批判しなくてはならない。僕はこの点で、全く合理主義者である。すべてが観念だという者は、僕の前で、走っている自動車に飛び込んでみればいい。僕の前で光って100メートル飛べるものなら飛んでみればいい。今の（時代あるいは自分の）科学的認識能力では因果がわかっていないがゆえに、「不思議・神秘に見える」が、実はまったく原因と結果の関係以上のものではないということも数多くあるということもまた事実である。

とはいうものの、もちろん科学的合理主義だけが正しく、精神的なもの、オカルト的なものはすべて間違いと言いきる科学万能主義の立場を僕はとらない。それほど愚かではない。世の中は基本的に、無秩序、偶然、カオスから成り立っている。連続的なあるいは1対1対応の関係、因果関係が明確なことは少なく、明確に見えるときも、「端数」の切り捨て、多くの飛躍、無意識の前提、錯覚を含んでいることが多い。無秩序な事象を「解釈」によってきれいにつなげたときに「必然」とか「科学」と呼び、それでもうまくつながらないことが数多く存在し、それを「蓋然」とか「オカルト」というにすぎない。無理な繋げ方が当たっているか否かは誰にも分からない。だからオカルトは、必ずしも非合理的認識だとは限らない。京極[96]267-8ページは、そのようなことを述べているという意味で正しいと思う。

- 4) 宇宙が「無」から生まれたというのは、理論物理学者ヴェレンケン博士が1983年に主張し、多くの人の賛同を得て、物理学ではひとつの「常識」となっている考え方である。昔は宇宙は小さかった。1ミクロンよりもずっと小さいときがあった。そこまではわかる。しかし最初はわからない。何かざざざと詰まっているようなものが、ざざざとゆえにそれは何ものかも観測することはできず、その意味で「無」であるという。私たちの知をこえたところからぼっと生じたというのである。私たちの知を越えているとは、何を意味するか。

ように、そもそもの根本を人間が完全に把握することはできないということは、徹底して考えれば明らかである。「説明」できたから謎がないというわけでもない。科学が発達してきたからこそ、科学への素朴な万能視は間違っていたことがわかり、科学の限界・限定性がわかってきているのが現在のものだ<sup>5)</sup>。上記の例も、偶然や不確定性や不明性が入らざるを得ない。亀という生物種がいなくてもいいし、まったく別の生物種がいてもいいのだ。

繰り返すが、生物種にこれほどの多様性（X種）がある理由は、一般的にはいえてもなぜ、Xプラス1種でもマイナス1でもなく、X種なのかは、絶対にいえない。『珍虫と奇虫』という図鑑や『生きもの地球紀行』『地球不思議大自然』（NHKテレビ）などで紹介されるような数々の生命の不思議<sup>6)</sup>。オウムの色模様が2センチずれていても、パンダの目の周りが黒くなくてもおかしくない。条件があったといっても、それしかないというほど限定的なものではないし、この地球上に無機条件から有機生命が発生したこと自体の不思議もあるし、進化も一般的には「分かる」が、それは一つの説明でしかないという感覚をぬぐうことはできなし、その時間の膨大なかかり方や突然変異とか多様性を考えると、やはり不思議だ<sup>7)</sup>。言葉があることも、一般論では分かるが、なぜアルファベットや漢字やひらがなはあの形に定着したかには偶然性があるし、ドイツ語や日本語の文法が別のものでもよかったのにこうなったのも偶然がある。言語の奥深さや多様性には神秘性がある。

- 
- 5) 生命や環境や社会・市場は異なった原理をもつ複雑な要素の相互作用の総体であり偶然も絡むために、科学的知見・法則に基づく完全な予測や完全なコントロールは不可能であるとわかってきている。科学が宗教に変わって未来を正しいものにしていくという素朴な「信仰」は、崩壊しつつある。
  - 6) 『珍虫と奇虫』（小学館学習百科図鑑）に出てくるすごい虫たち。象が死んだ仲間の骨をいとおしそうに触ること。くじらが協力して漁をし、バッファローがライオンに襲われた仲間を危険をおかして助ける行動。ギンガメアジが年老いた仲間に身をすり寄せて支えようとする行動。数々の生物の不思議な構造や行動。人間が知的感情的に優れていると単純にいえないし、分からないことは多い。
  - 7) 生存に有利な変化を選びとってきたというダーウィンの自然選択説は、ある環境に適応した生物を生み出すことを説明できるが、非常に異なる生物の発生を説明できない。突然変異、偶然とはそもそも何なのか。なぜその突然変異はそのようなものになったのか。そこを含めて考えるとわからないことは多い。科学で説明できるのは部分でしかない。

僕が絵を書くとき、なぜ今、ここにこの線を引き、この色を塗りたいと思ったのか。僕が土をこねてある焼き物を作るとき、その形になるのは、なぜか。それは言葉で説明できる領域だけのものではない。Aさんが病気になり、Bさんが長寿であることは、狭い範囲での必然性（例えばタバコをすったから肺がんになった）はあるが、大きなレベルでは、偶然でしかない（タバコを吸っても肺がんにならない人もいるし、タバコを吸わなくても肺がんになる人もいる）。ある戦争やある政治闘争のありようがなぜそうなのかをある程度論評・解説することはできるが、そうでない様相になることもありえるし、論文やメディアが自信満々に断定することへの違和感はぬぐえない。

### 哲学が捉えようとした「神秘」の領域

実は、哲学はこの謎・不思議・神秘というものの存在に触れてしまったがゆえの思考の領域だ。例えば、「存在」ということが謎でなくて、いったい何であるというのか。生命、無、死、主体、自己、私、心、精神、魂、宇宙、虚数、自然、文化、時間、空間、ブラックホールとは何か。よく考えると、わからないではないか。肉体と精神は別物であると同時に繋がっていて、その関係はよく考えるとわからない。「見える」とか「聞こえる」ということも一体なんなのか。過去と現在（今）と未来とは何で、過去を思い出す（記憶）というのは何なのかもよく考えるとわからないことだらけだ<sup>8)</sup>。なぜ僕は、自然科学にではなく、社会科学に、特に人権問題に感応するのか。そういう「僕」の「僕たるもの」は、わからない。

しかし通常は「よく考えない」から、謎だとはおもわない。池田晶子さんは、このところを（ある意味、それだけを）繰り返し語っている。彼女も僕も、考えざるをえないから考える。「合理的なことだけ」で世界ができていないことがみえてしまう。しかし、謎が見えない者には、考える必要がない。それだけのことであって、「謎がない」のではない。

宇宙を考えていくとその始まりや終わりや宇宙の外側がわからないように、また細

---

8) 中島[1996]『「時間」を哲学する』は、過去・現在・未来を一直線上に捉えたり、どこかにそれらがあるといった常識的な時間の把握の錯覚性を指摘し、時間は実は高度に概念的なものであるとするなど、「存在」の不確かさに届くレベルの議論をしている。

胞や原子や核や遺伝子などをみていっても、これが最小というものには行き着かない。この不思議さ。つまり、細かく見ていっても、外の宇宙と同じく、そこには無限が見えてくる。人間の力が及ばないことが分かってくる。「目盛りの間」には、宇宙があるのだ。宇宙は、すべてであって、虚数や虚無もブラックホールもある。ある人と出会うこと、好きな人が自分を好きになってくれることという不思議。自分を深くみつめれば、またそこには、無限も不思議も見えてくる。そのときに、自分なんてたいしたことないし、自分と他者との境目があいまいで、偶然や他者や歴史・文化、自然などのすべてに支えられていること、つまり“つながり”が見えてきて、謙虚さに至れる。

### 底なし谷でのつり橋を渡る感覚

自分が明日ガンとわかるかもしれない。阪神大震災のような大地震が、また自分の住んでいるところで起こるかもしれない。明日、あるいは来年、世界経済が破綻するかもしれない。なだれのように、経済や社会の信用が崩壊するかもしれない。ないとは言いきれない。自分のパソコンが急に壊れるかもしれない。核戦争がこれまで起こらなかったのは、偶然の幸運だ。キューバ危機もほんとに危機一髪だったけど、それ以外でも核戦争に至る可能性は十分にあった。原発が重大事故を起こしていた可能性もあったし、明日起こるかもしれない。そして、大地震や核戦争や世界経済の破綻や原発重大事故があれば、当然、僕等の生活は一変する。その闇の可能性が、リアルに見えるか見えないかは、大きな世界観の相違だ。

また、例えば、「人の狂気」は周りにあふれている。いつ、その「狂気」が自分に向けられるかもしれないし、また、自分が「狂気」に至るかもしれない。ほんの少しの差だ。自分も、ちょっとしたことで、精神的に不安定になり、自律神経失調になったり、強迫症になったり、「自分がコントロールできない状態」になるだろう。そもそも僕もあなたも自分をほとんどコントロールなどしていない。あなたも私も「心の安定を失う」ということのすぐそばにいる。自分が家庭内暴力（DV）や児童虐待をしたりされたりしないとはいいきれない。交通事故にあうかもわからないし、いつ失明するかもわからないし（僕は緑内障になった）、レイプされるかもわからない。泥棒に入られるかもしれない。多くの子どもが重大事故や大病にあわないことが不思議なくらいだ。これらは、実はほとんど防ぎようがない。私の努力や注意でなくせるも

のは一部だ。自分はない、自分には降りかからないと思っても、被害や事件に遭うときはあう。それが歴史であり、事実だ。僕はそこに、底なし谷でのつり橋を渡る感覚を持つ。

そういうことは本当にありうるからこそ、自分が、今日、そうならず生きていくことは、不思議だ。そういうことと、自分の個性がなぜこうなのかとか、地球が回っているのはなぜかとか、なぜ地軸は23度ほど傾いているのか、とかは、謎・不思議(非規定的)ということと繋がっている。星ができたり、生命が発生したり、根源的にはみんな不思議。人間の力とか言葉・理性・科学とかの及ばないところがある。いっぱいある。そういう日常の「底」とか「すぐ隣」にある「非日常の謎の領域」を、僕は、虚無や虚数のようなブラックホールの底なし谷のようだと感じる。それは時に、異次元空間のように、急に僕の横にぱっくりと口をあけるイメージ。見える人には見えてしまう、ようなもの。自明とされていたことが自明でなくなる。正しい、当然、そこまでしないだろう、してはいけないなどといった常識・道徳が、そうでなくなる。そういう入り口があちこちに開いている。それが、社会の底がぬけていると自覚する感覚。

ものが見えること、音が聞こえること、におうことのすごさ。花の形の美しさ。そこには、“すごさ”がある。人間にとって、光のうち見えているものは一部だし、匂えるのも味わえるのも一部。もっと違う機能をもてば、違う「世界」が出現する。つまり、私たちは、何もかもわかった上に立っているのではない。よくわからないことの上に、途中から一部がわかって、それを「日常世界」として、そこでの法則や慣習を利用して何とか生きている。わからないことがあることを忘れていないか、理性や科学(といわれるものの表面性)に依存しすぎていないか、と考えれば、そうだったと気づく。

### 「目盛りの間」

これを、象徴する表現として、「ものさしの目盛りの間がないとおもっている人がいる」という言い方がある<sup>9)</sup>。表面的に見えることだけ、科学で「ある」といわれて

9) 宮台・速水 [2000] 『サイファ覚醒せよ!』でも使われている。

いることだけしか「ない」と思っている単純な人がいる<sup>10)</sup>。経済を知るとは、教科書にかいてあるような理屈を知って、銀行や証券の動きが分かって、日経新聞の経済記事がわかることなのだとおもっている人がいる。生産性や成長率が高いことがよいと考える人がいる。

だが、深く世界が見えてくれば、そんなことではないということが分かってくる。科学や学問というのが、ある部分の合理的説明ではあっても、そこには領域の限定があったり、無意識の前提があったり、論理的飛躍があったりする。ある主観を客観的なように装っているだけのこともある。科学といっても、多くは立場やイデオロギーや規範・倫理が影響している。例えば豊かさとはなにかを一義的にはいえない。「正義」や「善」は、力のあるものや権力が好き勝手に語っている。科学は、個別のものがありそれが集まったものがあるとき、ある特定の見方で切り取り概念構成して「本質や定義」というレッテルを貼るが、そうした何らかの本質規定は、実は多様性や多くの「個別性・混沌・過剰・例外・偶然・中間領域・不明瞭な部分」などをこぼしていることが多い。

だが、科学・合理を万能視し「目盛り」だけをみている人は、「本質」をいうだけで過剰な現実をすべて把握した気になり、2ミリと3ミリの間はないと言いきったりする。14センチ6ミリといえば、完璧と思っている人がいる。自分はクリアーだと思っている人がいる。定義すればそれですむと思っている人がいる。自分の専門分野（例えば狭義経済学）だけやっていたら社会のことが説明できると思っている人がいる。資本主義とは何々だとか、日本人は何々だ、男とは何々だ、とか、大雑把なことを言い切ってそれですむと思っている人がいる。

だが、目盛りの間には無限や飛躍がある。ものさしの目盛りの印刷の太さはどうなのか。「1.3ミリの線」のなかに、無限が詰まっているという不思議。目の能力が顕微鏡のようであれば、いくらでも小さい差異・距離が見える。永遠に小さな距離が見え

---

10) ある自然科学者は、教育界での「生きる力」というような概念は、物理学の「力」の概念のように明確に定義されておらず、「生きる力」という「意味をなさない表現が教育界でさえ流行する社会は、論理的思考力を育てる環境からはほど遠い」という。（『朝日新聞』02年6月12日）論理的思考力は大事だし、今の教育論議の質は低いのも事実だが、それは「生きる力」という概念を否定することではない。「意味をなさない」と直感的に拒否してしまうような狭義合理主義の固くて狭いアタマしか持ち合わせないことが問題であるということがわかっていない。

る。また宇宙に出会う。個別性や多様性をみていけば、「本質・概念」の曖昧さにたじろぐ。僕らはただ、人間の、現代人の、この日本の、自分のジェンダーの「日常感覚」に生きているだけなのだ。

目盛りの話をしたのは、僕は「学者」の端くれにいるからこそ、「数字」に代表される「科学的なもの」の「いいかげんさ」にこだわっているからだ。「数字のような自明の極致のものさえ、あやふやな“底”の上にある」といいたいのだ。意味のない端数だ、誤差だと「底の上」だけで切り捨てて、きれいに数字で掴まえた気になっているが、実は、現実こそ「底の上と下を合わせた」複雑かつ豊かなものであり、その豊かさの表れが、端数とか割り切れなさとか説明しがたいもの（底の下がある！）があるということである。「底の上」だけの法則とかモデルとか理論とか、それに基づく説明などといったものはほんの部分でしかないのだということ。

これはもっと一般化して言えば、言葉（それに基づく論理・合理）というものが、豊穡な世界を「認識するために切り取る」ものであって、それによって便利な面もあるが、実は「完全に言葉で世界全体をつかまえること」などできないのだということ。言葉に依存すると、言葉の外を見落としてしまう面もあるということへの気づき。それをいいたいのだ。あるいは、言葉に可能性があるとすれば、その意味を実は「近代的な知=五感」以上のもので豊富に捉えているから「豊かになりうる」のだともいえる。

つまり、近代社会での認識は転倒している。科学や言葉や概念が客観的に確かなものとして先にあって、それで現実を割り切り真実を見た気になっている。完璧には分からないのだ、ということをおぼえている。五感ではつかまえられない、言葉にならない「目盛りの間」が見えていない。人間の力の限界が見えていない。転倒している。

### 無限と連続性

私たちは、無限や連続性の中に生きている。それを、認識できる範囲で、目盛りを打ち、言葉・概念を与え、理解した気になっている。例えば「男と女」という区分・言葉を与えて、人間には2種類あると思っている。だが、人間は人それぞれだ。生物学的身体区分もジェンダーもセクシュアリティも個人差の宝庫であり、二分法の枠に収まらないグラデーション（多様な性）というしかない。性格はどれひとつとして同

じものはない。二分法やステレオタイプ把握でこぼれ落ちるものが多いと気づくと、「この社会の底がぬけている感覚」に近づける。

時間も、切れ目のない連続であり、主観性とからむものであるのに、人間が1日や1年を作り、暦をつくり、形や名を与え、「客観的な時間」だけを唯一の正解とし、安心してきた。音も、本当は無限の連続と複雑性・複合性の中にあるのに、人間がドレミをつくり、楽器を作って、そこから転倒して、ドレミしかないとか、楽器の音だけ、人間に聞こえる音だけ、純粋な音だけを認めて、それ以外をノイズとか「音楽でない」と切り捨てたりするようになってきていることがある。名づけ、形を与えているにすぎないという部分に目がいくと、「日常生活で見えない世界があるという感覚」が浮かび上がる。

「構成要素に分解して把握する」というのも、科学的な方法で、「目盛り」の発想だが、これも、限界は今や明らかだ。自分をどこまで分解しても、各要素が本質じゃないし、要素だけでできているのでもない。要素を合わせれば全体になるというものでもない。「自分」などというものは、目に見えない領域を含めての総体的なものであり、自分は自分でないものと連続的なのだ。

言葉による区分や理解、要素による把握、したがって合理的認識とは、ある程度整理して掴むためには必要で便利なものであるが、決して、完璧ではない。

それを意識するのが、「目盛りの間」である。見えているところだけがある、したがって見えていないところ＝「目盛り以下」は「ない」とおもっている人は、1の次が2であるというように、AだからB ( $A \Rightarrow B$ ) と単純におもいこめる。言い切れる。自信いっぱい発言できる。迷わない。間の複雑性（非法則、非定型）を見ない。だが、繊細にものが見えてきた人には、そこが引っかかる。そうだろうかとおもう。躊躇が出てくる。言い切る気持ちよさに、酔えなくなる。相手（反対論者、無知・愚かだと自分が思ってしまう人）を簡単に見切って切り捨てられない。

これは、近代合理主義が、あたかもすべての生活や世界を覆っているかのようになす考え方に反省をもつかどうかということに繋がる。学問は、現実の解明のためにあったものが、転倒して、学問の体系の範囲で、現実を分かった気になってしまうというようなことがある。学問的に権威のある、正しいとされていること、単純な理屈

や常識を前提にして、変化や複雑性を見落とすというようなことがある。謙虚に現実を見つめると、見えてくる「あるもの」がある。

### AならばB (A⇒B) の飛躍

例えば、「子どもが不良になるのは」⇒「母親が働いている（子育てを手抜きしている）からだ」というような意見を言う人は後を絶たない。でも、ここに飛躍があることは、少しでも考える人、実態を知っている人ならわかるだろう。同じように、「決まりだから、今までずっとそうだったから」⇒「名簿で男性を先に書く、PTA会長は男性、男は君、女はさん付けで呼ぶ」、「政治を変えなくてはならない」⇒「負けるような、理想的なことを言ってるばかりじゃなくて、選挙は勝たなきゃ意味がない」、「セックスして妊娠したから」⇒「戸籍登録結婚しなくてはいけない」、「結婚したんだから」⇒「浮気（心変わり）はダメ」、「家族なんだから」⇒「心配・干渉して当然だ、秘密がなくて当然だ」、「学歴が低くていいところに就職できない」⇒「努力しなかったんだから仕方ない」、「メスとオスの生殖で子どもができるのだから」⇒「同性愛は間違いだ」、「皆が幸せになるために」⇒「みんな仲良くしなさい」、「子どもは成長するために」⇒「学校に行きなさい」などなど、おかしな論理が周りにはあふれている。

でも少し考えれば、もし「ある人」にとって、自分の思考の前提を疑わなければ、「そこには飛躍がないことになる」ということが逆にわかる。論理的には必ずしも必然でないのに、「その人の目盛り」ではそこは必然のようにつながってしまう、ということはいくらでもある。つまり、母性や父性は絶対的に存在し、母親とは「母性あふれ無条件の愛情を子どもに与えるもの」で、そうすれば子どもはまっすぐに育ち、「不良」などにはならないとか、「不良」はよくないとか、男女同権主義の主張は間違っていると自分の思考の前提を疑わない人なら、「子どもが不良になるのは」⇒「母親が働いているからだ」といってしまうのだ。早く計算できた方がいいとか、近道をぱっと考え、早く意見をいえることなどがよいこととされているが、そこには何らかの「隠された前提」がある。異性愛・戸籍登録結婚制度を根底から疑わない人は多い。古い性的保守主義の人も多い。そうならば、上の「AならばB」の飛躍は飛躍でなくなってしまう。

だから僕は言いたい。謙虚に現実を見つめ、豊かで、複雑で、多様で不可思議な「日常生活で見えない世界」に目を凝らしたいと。隠された前提に気づきたいと。立

ち止まって「それは本当か、なぜそうなのか」と根拠を問うてみればいい。そうして論理の飛躍に気づきたいねと。A点とB点がある種の論理的説明でつながっていると信じれる人は、科学や理屈で満足できるが、そこにこぼれているものはないか、隠れた前提はないか、 $A \Rightarrow B$ という説明で何がわかったのかと考える人になりたい。(そうおもうとテレビや学会でエラソーに議論していることの空しさが見えてくる。)<sup>11)</sup>

だが、それは、自分の限界へも光を当てる。僕は、「自分はいい奴だ、自分は論理的だ、自分は正しい」と思っていたこと自体の、自分の愚かさ・傲慢さにも、ようやく気づいてきた。「あの人はあんなことって愚かだなあ」と思うとき、自分のほうも実は自分なりの隠れた前提があることに自覚的でないと、とつてもヤバイ。「社会の底がぬけている」ことは、なかなか分からないものだ。

### 豊穡の世界

絵を書くとき、その人の無意識が出る。表情、カラダの動作、しぐさ、話し方(応答の仕方)、リアクション、声、体の緊張に、その人の無意識が出る。服装、髪型、下着、靴、爪、化粧などで何を選ぶかにその人の無意識が出る。計算しているつもりでも、そこにその人の無意識が出る。

---

11) ル＝グウィン『闇の左手』でいう。「未知のもの、予言し得ないもの、立証し得ないもの、これが生活の基盤になるのです。無知は思考の基盤です。立証不能であることが行動の基盤になるのです。神が実在しないことが証明されていたら、宗教は生まれなかったでしょう。…また神の実在が証明されていたら、やはり宗教は生まれなかったでしょう。……言ってごらんさい、ゲンリー、あなたにはなにが分かっていますか？ 予言しうる、確実な、避けえないことは何ですか——あなたや私の未来において、あなたが確実に知っていることは？」

「死ぬことです」

「そうです。答えうる問いはたった一つです。ゲンリー、しかもわれわれはその答えを既に知っている……人間の生活を存続させるものは、永遠不変の不確実さですよ、次に何が起こるかを知ることはできないのです」ル＝グウィン[78]82-3ページ。

また京極[96]で登場人物たちが言う。真実は一つと思ひ込むのは思いあがり。体験はいくとおりもある答えのひとつ。…不思議なことなどない。しかし複雑系の解析はときとして大きな誤差、初期段階の数値の差による大きな解答差をもつ。だから人は、世の中は不思議と言う、と。726-7ページ。

何に悩むかとか、どこでどのように失敗したかとか、どのように満たされていないかとか、何にチャレンジしようとしているかということで、その人の“ぎりぎり”，したがって本音や無意識や自分の囚われの部分がでる。「成功」していたりうまくいっているところではそれは出ない。その人の無意識のありようや具体的な悩みや問題には、豊かな情報が詰まっている。

それは、「目盛りの間」とか「日常生活で見えない世界」があるがゆえの複雑さ・豊穡さの反映である。日常生活の安定の枠内でルーティーン・ワークをしていればいいといった、頭で意識していることだけの単純な世界ではないということ。

### 不確かさへの覚醒

映画『メメント』（2000年アメリカ）は、「記憶とは？ アイデンティティとは？ 真実とは？」ということを考えさせる快作だ<sup>12)</sup>。そいつにとって真実とは、自分が信じていることということ。主人公は意識的に目的をもった（記憶という形での物語）が、そのことを忘れてまた始まる。でも人なんてそんなもんだ。10分前の記憶がないか10日前か10年前か、量の程度の差はあっても、記憶など自分でつくりあげるもの。記憶の多くは部分化していたり、間違っていたりするが、それを思いだし再焼付けし、あるストーリーに仕立て上げることで、ゆるぎない「真実」になったりする。そういうことはいっぱいある。

思い込みや自己欺瞞がない人などいない。幻想ということ（物語の上に生きていること）に無自覚な人はいくらでもいる。決めつけや囚われに無自覚な人も多い。そうやってほしくないという無意識が記憶をゆがめることも。何でこんなことになっているのか、よく考えるとわからないことなどもある。相手が100%悪いと思って始まった喧嘩だが、その喧嘩を続けているとき、何が原因だったのか、ほんとに相手だけが悪いのか考えるとわからなくなることがある。怒りの気持ちが確かだったのに、何に怒っていたのか。口ではいえないが、確かに、あんなに怒っていたり相手が悪かったりしたはずなのに、というようなこと。「自分の明確な意識」というものへの謙虚な振り返り・相対化がいる。

---

12) 10分前のことさえ忘れてしまう記憶障害の男が、妻を殺した真犯人を捜し求める話。日本では2001年末に公開。

### エリートに見えない領域

この節の最後に、「エリートには見えない領域がある」ということも、「理性の外」「目盛りの間」の意味の一つであるという話をしておこう。

分かりやすくするために単純化していうが、偏差値的に高い人や従来の社会常識を受け入れている人たち（の多く）——僕を含めて——は、「不良」「ヤンキー、チーマー」「やくざ」になったり、「スポーツばかりすること」やお笑い芸人になったり、下町の商売人になったり、町工場などで働くブルーカラーになったり、非正社員になったり、失業者になったり、病人になったりすることは、「社会的敗者だ」と心の奥底では思っている(思っていた)と思う<sup>13)</sup>。我慢してでも勉強して、いい大学・いい会社に入って、経済的・身分的に安定した生活をおくることが「成功」だと思っている。そして「成功」はよいことと思っている。社会の「下っ端（下層）」は、「負けの人生」だと思っている。そんなことは口先では言わないし、自覚さえしない人は多いが、ホンネや深い意識の部分ではそう思っている。

「親や先生のいうことを聞き、常識を守り、皆と仲良くし、反対意見を言ったりせずに組織や慣習に従う」ことがよいことで、そうでなくて皆に嫌われたりすることは勝手にダメなことと思っている。「ちゃんと働き、結婚し、子どもをもち、お金に困らない生活をするのがよいこと」＝「幸せ」と思っている。あるいは、金とか出世でないとしても、「社会的活動など意味あることをする」ことがよいことで、そうでないのは「無駄に時間を過ごしている」って感じてみている。

僕は少なくともそういう感じをもっている面があったと思う。僕は、一方では本気で、「社会的不平等はダメだ、もてるかどうか、外見なんて関係ない」なんて思っているくせに、他方で、自分が失業するなど、「社会的な上位・成功的状況」でなくなったら、あるいは「誰からも見向きもされず、不細工で、気持ち悪いただのオッサン」になったら「惨め」「負け犬」というような感覚をもってしまう奴だったと思う。

このことは、僕も含めて、「お勉強だけの人やまじめな人や社会問題の活動家」のコンプレックスの裏返しだったのではないか。勉強や社会運動をせずに自分だけの人生を楽しんでいそうな人たち（ヤツラ）、ファッションや音楽や恋愛やスポーツや遊び

---

13) もちろん、大成功して大金持ちになった芸人や下町の商人、社長は、「成功」ゆえに秩序を這い上がることとなる。ここで述べているのは、多数派がもっている無意識の優劣秩序・構造のことである。

などで楽しそうに生きてるヤツラに対して、自分が「負けている」とか「自分の選択が間違っていた」と認めたくないからこそ、「あいつらは楽しんで何も考えずに生きているが、そのうち痛い目にあうさ」ってな感じで、彼らの生き方を低く位置づけ、いつか自分が「逆転」してやるという気持ちをもっていたのではないだろうか。「感性・遊び」よりも「偏差値・学問・現実の金儲け（収入）・地位・力があること」が上位っていう考え。

僕の場合を考えて、少し言い換えれば、「なんでパチンコやショッピングや酒飲んで憂さ晴らしできたり、カラオケに夢中になれたり、三文メロドラマみたいな恋愛ごっこをやってられるんや」と、「庶民の生き様」を少し馬鹿にして生きてきたように思う。「そんなこと（＝身近な生活を楽しむ）」よりも「現実的に働いて稼ぐ」とか「大きなこと（＝社会の差別や構造のことを考え、社会活動すること）」のほうが大事なことだと思っていたのだ。いろいろな人の豊穡な人生を想像できずに、「何も考えずに日々をやり過ごしている」と低く見て、自分のやっていること（だけ）が意味あると信じるような考え方。あるいはそれと類似した、「みんな気づき、僕と同じ考えになっていくことがいい」というような考え。少なくとも僕は、自分に自信を持つ心理的メカニズム（動き）の中に、そういう側面があったように思う。

だが、僕は、歳をとるにつれて、ようやく、徐々に、「ほんまに、会社員とかの安定した地位とか、会社での仕事の生きがいか、社長や学者や弁護士や医者になるとか、社会活動をするなんてことは、他のことより偉いというのでなく、ひとつの人生でしかないなあ」と思うようになっていった。つまり、やくざ・マフィアなどの映画を見たり、歌手や俳優や芸能人やスポーツ選手を見たり、映画や芝居や小説を作っている人をみたり、身近なところで何とか助け合ったり語り合ったりしながら毎日をしたたかに生き抜く人たちのありさまをみて、「そういう充実感もありやないか、俺もみんなもちょぼちょぼやんけ」と思うことが多くなった。

近くの公園でボーっとするとか、好きな友達と心のこもった話をするとか、その人のことをおもう時間を作るなんてことの大事さを思うようになっていった。上から、「庶民を助けてあげる」どころか、それって思い上がりで、みんなそんなこと求めてないし、それなりに人生の充実感を求めてがんばって生きてるやん、と素直に思えるようになっていった。「精神的に崩れることはだめなことで、できるだけ行動は理に適っているほうがよい」なんてことはないんだって、ようやくわかってきた。僕は、

以前は、社会の変革が大事で、そのために本を読んだり活動するのは意味あるけど、つまらない人とつまらない話をして時間を消費するのは無駄だと思っていたのだ、と気づいた。

嫌な人と酒を飲んだり、いやいやツマランと思えることをしたり、失敗することも、何らかのものを僕にもたらすという現実があった。バカな話を友達として笑ったり、旅行したり、浮気したり、子どものことで悩んだり喜んだりするというようなことも、ひとつの充実した時間の持ち方やねんなあと、カラダというかココロの奥のほうで納得できるようになってきた。よかった、よかった。自分の目指すものと、生活とがだんだん近づいてきたんだと思う。

生き生きと笑ったり、泣いたり、怒ったりすることができるのが素直で、なんか「ええかっこしてオスマシして、自分の弱さもさらけ出せず、冷静な振りして、表情も豊かでなく、カタク生きる」なんてことの不自由さ、ダメさがだんだんはっきりと分かっていった。「自由」などと口先・頭の先では言ってきたが、実は自分がきちきちの現実主義的な秩序上位志向、エリートの価値観に囚われていて、「弱さを受け入れられるラクさ」がなかったんだなあ、「自由」でなかったんだなと自覚できるようになってきて、肩の力が抜けていったように思う。

とはいうものの、「ハイ、この日常の何気ない幸せに感謝しましょう」というような陳腐な結論に至りましたといたいのではない。僕は確かに、いろんなものに囚われていた。でも同時に、多くの人の日常も囚われている。僕の苛立ちや理想には、まさにこの消費社会のつまらないありようへの異議申し立てが含まれている。エンパワメントできていない人々のありようを何とかしたいという思いは今も強くある。じゃあ、俺はどうしたいんだ？ みえてきたものをどこにつなげることができるのか。

付け足せば、人の関心の持ち方も千差万別で、ある人は労働問題、ある人は性差別問題、ある人は環境問題、ある人は教育問題、ある人は平和と戦争問題、ある人は外国人差別問題、ある人は介護問題、それどころかある人は少年野球のコーチ、あるひとは押し花教室、ある人は俳句、ハイキング、ある人はコーラス、ある人は友達とメール交換っていうように、関心が強く向くところは分かれていてバラバラで当然なんだよね。

ということは、社会貢献といってもいろんな領域やレベルがあるし、みな僕と同じようなことに関心もって、同じようになることが目指すものであるわけがない。で

も、頭ではそう思ってたけど、心の奥底では、「これのほうが正しいとかいいこととか有効」と思うようなことがあって、そこに向かって人が変わってほしいと願うような面があったと思うんだ。でも、さっきの例と同じく、自分の関心のあること以外も、本当に豊かで大事なんだ。人はユニークであるからこそ、それぞれがやることも「やるべきこと・領域」もユニークで当然なのだ。その間に優劣はなくて、どこからでも、深く関わられる可能性があるんだってこと。

そういうことが見えてきたことも、「常識的な社会的成功や自分の思うよいことだけがいいこと」という「目盛り」的なものの限界の自覚という意味で、「目盛りの間、社会の底の穴、見えない世界が見える」ってことのひとつだと思う。人生の複雑さ・豊穡さ・多様性を、そういうことを含めてカラダで分かるってことは、これまであまり「理屈」としては位置づけられてこなかったように思う。だからこそ、ここで、その領域があることを再確認しておきたいと思う。そしてそれを踏まえて、陳腐な現状肯定論ではない、ある高い地点へ届きたいと思う。

## 2 表層世界と「混沌の闇世界」

次にここで、以上の「この社会の底がぬけた領域、目盛りの間があるという問題」を、栗本氏や宮台氏の考えを使って、少し整理された理論的モデルのような形で提示しておきたい。そうするとわかりやすくなる人がいると思うから。

「世界」<sup>14)</sup>には「言葉」・「日常世界＝表の論理」だけではカバーできない広大な領域がある。動物をみてみれば、言葉でない「ツール」で、「世界」を“感じ交流して”いるであろうことがわかる。それと同じように、人間も、音楽や嫉妬心や表情など、狭義科学＝「言葉」的なもの以外に関わって暮らしている。信仰心や非論理的行動といった、日常世界の論理では接近できないような、幻想的・詩的・神話的な領域がある。こうした把握を栗本氏および宮台氏は、独自のスタイルで表現する。

---

14) 宮台氏は、コミュニケーション可能なものの総体を「社会」と呼び、その外の自然法則や神などをひっくるめた、人間が認識できる全体を「世界」とまとめる。宮台・速水[2000]P30

### 栗本氏の把握モデル

栗本慎一郎氏は、『鉄の処女』[1985]で、哲学の現在の到達段階や分布を掴むために、古今東西の哲学者たちの思想を、あるひとつの「暴力的」な視角によって切り取り単純化しようとし、そのために、思考の対象となる「世界」のあり様を、近代的理性の感覚でも掴むことのできる、分かりやすい、現象している表層世界（アポロ的秩序：Aゾーン）と、現代科学の言葉では掴みにくい、社会の深部の、見えにくい、しかし私たちが大きく無意識部分で規定している、混沌たる闇のカオス世界、生命的根源の世界（デュオニソスの混沌：Dゾーン）、および、その両者の間の境界域Uゾーンの3つから成り立っていると措定した（図-1）。

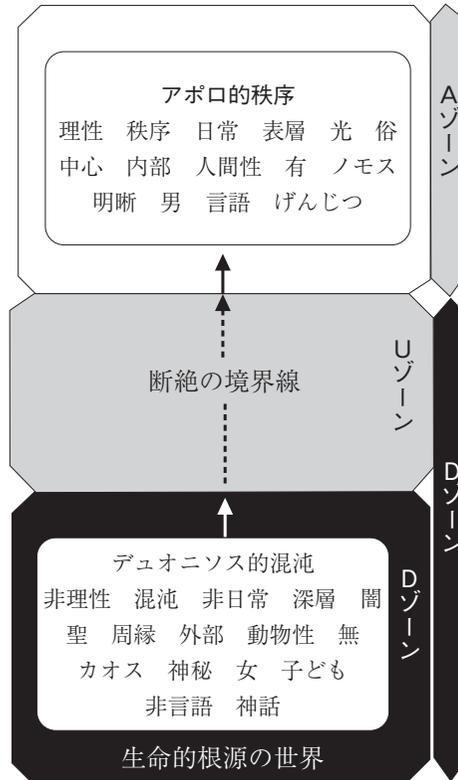
このモデル的把握は、仮説でしかない。しかし、このように明確に概念化＝分類化することで、僕が「なんとなく感じていたもの」、言い換えれば僕が思考したい「もうひとつの領域」があるという、思考の枠組みが明確に示される。こうした図式を認めることは、僕の従来の世界観に大きな変更を要求する。栗本氏の定義は決して十分明確というものではないが、僕は、栗本氏のいう「Dゾーン」的なものを「混沌の闇世界」と呼ぶこととしたい。その概念で、とにかく、いままで述べてきたような、非言語的・非論理的な領域、ココロの闇とか無意識の領域、信仰に関わる領域などを代表して一言で掴んでおきたいと思う。

### 宮台氏の把握モデル

次に宮台真司氏（および速水由紀子氏）の世界把握図式を紹介しよう。彼は、アイデンティティを支える人の帰属は従来3種あったとみる。それは、家族、血縁といった「選べない第1次集団・共同体」に帰属するという「第1次帰属・所属」、会社やPTAや世間的地位などといった「選べる第2次集団・共同体や組織」に帰属するという「第2次帰属・所属」、自分の趣味や信念や生き方といった自分らしさ（自己定義）に関わる「第3次帰属・所属」である。

この3つは、「社会」の内側に存在しているが、実は、この3つにはあてはまらない、「社会の外側」に関わる「第4次帰属」もあるとみる。この「社会」の内側には準拠しないものによって自己定義をせざるを得ない人、そうしたい人を射程に入れて、「社会」の外側から生き方・倫理を動機づける何かを、宗教でない形で提示しようとする。すなわち、社会の外側を射程に入れて思考せざるをえないと彼は自覚するので

図1 栗本氏による世界把握  
現実の現象世界

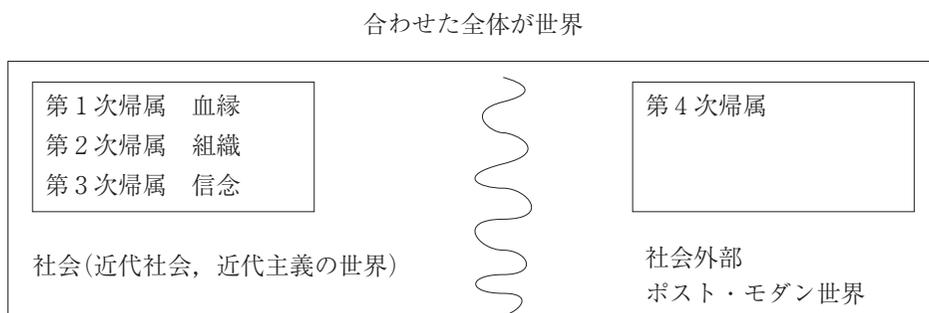


出所)栗本 [1985] p181

ある。

さて、これらの概念を使って少し図式的に単純化していえば、僕は、昔は、上述した「Aゾーン」や「第1・2・3次帰属の世界」という合理的・言語的領域（表層世界）しかないし、また、そこしか問題にしなくてよいと思っていた。非合理的な部分は、迷信であり、宗教であり、封建制遺物であり、そんなものは合理的に考えて克服していけばいい、あるいは無視しておけばいいと割り切っていた。でも、自分の喪失体験や、他者や歴史や、政治や社会運動や流行や犯罪や戦争や芸術や愛や家族や性やその他もろもろの「現実の複雑性」を見ていく中で、「Aゾーン」「1—3次帰属世界」と「Dゾーン（混沌の闇世界）」・「第4次所属領域」の両方を統一的に捉えることこそ必要だと徐々に思うようになっていった。

図2 宮台氏の世界把握(伊田によるまとめ)



これは僕にとっては、大問題で、自分の認識領域も発想も根底から変わることを意味していた。切り捨ててきた領域、とくに、「宗教」や「情熱」や「非合理」へ「合理的」(?)に接近するという危険な道に足を踏み入れることになる。だが、僕が十代のころに『次郎物語』や『怒りの葡萄』『カサブランカ』、あるいは『狂い咲きサンダーロード』や『狂った果実』(日活ロマンポルノ版)に感動したことは、他でもない僕なりの何か突き上げるものがあったからだ。「胸をうつもの」を好んできたのに、理論体系・認識体系にはそれを入れようとしてこなかった。今まで「なかった」のではない。「あった」のに、みてこなかっただけではないのか。理性・論理的記述スタイルではつかまえがたいものに、僕の感受性を再度開いていく契機、それが、栗本氏や宮台氏の図式を受け入れるという「決断」だったと思う。

### 知性の多重性

「混沌の闇世界」領域は確かに、明確に言語で記述しがたい領域であるがゆえに、曖昧な印象をもたれると思う。だが、例えば、脳生理学なども示すように、記憶力や計算力などだけが脳の働きなのではないことは近代科学的表現でも明らかであろう。新しい環境に適応する力、まったく新しいことを思いつく能力(ひらめき)、経験に基づく発想やカン・直感、連想力、独創力、高度な判断力などが、広義の意味で「脳」の働きであることは間違いないが、これらは「狭義の合理的認識」の枠を越える力でもある。それらが「混沌の闇世界」に関わっていることは想像しやすいのではないか。

常識的な言葉を使って考えてみても、「知識」および、それを複雑に組み合わせる「思考・観念」という「合理的なもの」なものだけでなく、私たちの脳・心の活動に

は、「感情」というものや、さらに原始的な「感覚」——これは身体性に関わるであろう——といったものがあり、これらはあきらかに前者の「知識・思考」とは異なっており、その独自性をみとめることは、「混沌の闇世界」へ目を向けさせるだろう。そして、前者の「知識・思考」さえも、ていねいにみていけば、上記した直感や独創性に関わる部分がある。「粘り強さ」とか「長考できる性質」とか「挑戦心」は、論理的数学的知力とは別物だろう。「想像力」や「キレイな心」も同じだろう。それらはどこからくるのか。どこにつながっているのか。

また、脳や心を考えるとき、人間には「知性」があるといえるだろうが、それを単純に「合理的なもの」と言い切ることはできない。というのは「知性」といっても、その内容には多重性があるからである。この点に関して、認知心理学・認知脳科学等を踏まえて澤口俊之北海道大学教授は以下のような知性に分類する。

すなわち、言語的知性、絵画的知性、空間的知性、論理数学的知性、音楽的知性、身体運動的知性、社会的知性（人間関係、社会関係の知覚、理解、それに基づいて社会的行動を行う知性）、感情的知性（他者の感情・表情や自分の感情を理解し、自分の感情を適切にコントロールする知性）、および、これら8つの知性を統括し、計画を立て、社会的規範と状況に応じて適切な判断をしつつ言動と感情をコントロールする知性である「自我」などである。最後の「自我」は、人格や理性、主体性、独創性、社会性などにも中心的な役割を果たしている高度な知性だと澤口氏はいう。

このように整理してみると、たしかに人間が考えたり感じたりしているものは複雑で、したがってその人間が集まって成り立っている社会も複雑だと思ひ至る。受験用偏差値が高いなどといった能力はほんの一部でしかなく、学問だとか理論だとか報道などが述べている「言語化していること・理屈っぽいこと」「狭義の知性・知識」も、「現実全体」からみれば部分でしかなく、「浅い説明」「後付けの屁理屈」の場合も多く、人間が（自分が）、「合理的」にすべてを掴みきっていると思うことがばかげていることが分かる。絵画や音楽を感じる部分や、社会的知性や感情に関わる部分、それらを統括する「自我」の部分、いわく「掴みたいもの」「広大なもの」につながっている、あるいはそうしたものに規定されているように捉えないと理解できない。ひらめきや感情受信力や主体性や独創性など、それがどこからくるのかを思うと、生命の過剰性、「混沌の闇世界」に目が向かざるをえない。「天（神）の啓示」という、多くの人が語ってきたことは、この「混沌の闇世界」のエネルギーの別表現に他ならな

いことも多かったであろう。

### 「混沌の闇世界」を考える必要性

「理性・論理的記述スタイルではつかまえないもの」をどうして考慮しなくてはならないのか。その問いに深く答えることが〈スピ・シン主義〉全体の課題なのであるが、簡単にまとめておけば、ここを考えないとダメな問題が増えてきたからである。

学問的にも「現代思想」は「混沌とした生命の過剰に対して理性は何をなしうるのか、宗教をこの問題に対する『逃げ』の装置としてではなく考え直すことができるか」(栗本[85]p179)を重大な問題としてきたが、それだけではない。

現実社会で起こる諸問題を考えても、技術の自己肥大と経済の蓄積様式変化を伴う成熟社会段階に至る中で、地域共同体や家族が崩壊していき、高度成長期の近代社会の仕組みや発想の限界が表面化してきたのであり、皆が前提と信じ込んできたことの自明性が失われてきたのである。そのときに、近代主義的科学(既存学問)の繰り返しでも、前近代への復帰や宗教回帰でも満足できないとすれば、合理科学的な思考スタイルを基礎にしつつも、その豊富化として「混沌の闇世界」・「第4次所属領域」を含めて、ポストモダン水準<sup>15)</sup>での新しい、説得的な発想や学問やルールや倫理<sup>16)</sup>が必

15) 宮台真司さんがいうように、ポストモダンは、「モダンの後」というより、「後期近代」ということである。徹底して近代を進めることで、ポストモダンに至れるのであり、近代を乗り越えるためにも近代を徹底するという2段階革命論として、現在のポストモダン論はある。

「ポスト・モダンとは、モダンの一つの顔であり、モダンが自己充足に陥ったり、閉塞状態に甘んじたりする『停滞』を打破する思考と運動である、と大枠つかまえることができる。その上でいえば、近代思考が原理的にもっていた、要素主義、人間中心主義、本質—現象〔表出〕論、進歩史観、権力=暴力論、文明—未開論等、を総体として乗り越える原理を提出することを目論むのが、ポスト・モダン論の特徴である。……ポスト・近代といいながら、近代『以前』の、近代『以下』の議論や行動もあることには、十分に気をつけたい。」鷲田[93]281—2ページ。

16) 倫理(エシックス:語源ギリシャ語)も道徳(モラル:語源ラテン語)も、もともとは内容的には同じらしいが、多様な使い方が存在しており、各人が再定義して使うしかない。例えば、窪田高明氏は、倫理を「社会の中で人間関係を作り出し、規制している意識的、無意識的な規範の総体」、道徳を「人間の行為の評価を示す体系的な言説」とする(大庭・安彦・永井[2000]p118)。倫理は「在る」ものであり、道徳は「善悪を評価するもの」という区分もできようが、僕はもう少し日常用語の感覚に近づけ

要とされる。上記の図式把握は、その志向を示す装置である。

### 靈感のある哲学へ

自分の認識の視力が、言葉・論理の世界の外側に開かれると、「無限の豊穡さ」に直面するが、それは同時に無秩序の中に投げ込まれ、自分の足もとを不確かにする側面ももつこととなる。あまりの「世界の大きさと複雑さ」に圧倒されて、従来の自分の信じてきた世界やそれに基づく安定が揺らぐのである。逆からいえば、狭い表層世界すなわち表面的な世間的・市場主義的状况をすべてと思えるような狭い感受能力だからこそ、自分が全能感や自信をもててきたのである。

ここまででいいたかったことは、この「混沌の闇世界」領域が見えることがまず必要ということであった。表層世界だけの近代主義的鈍感さと単純化を減らそうということ。繊細に、日常の感覚とは異なった別のチャンネルを開くなかで、閉塞感を突破しようということ。もちろん単純な神秘主義ではなく。そしてこの領域を組み込んで、自分の世界観（生き方）をつくっていくことが、社会運動や学問や教育や政治などすべてに、大きな変化をもたらすであろうという予告をしておこう。

「靈感のない哲学は空虚であり、哲学のない靈感は盲目である。」<sup>17)</sup>

### 「混沌の闇世界」の日常への表出

この「混沌の闇世界」は、日常世界にどのように顔を出しているのか。すでにその一例は示したが、もう少しここで例示しておこう。

正しい理屈を言えば人や社会は正しいものにも変わるというものではないということがある。これは、人や社会が「理性部分」だけではないものから構成されていると理解することで、納得できる。人が動くのは、「情」とか「魂」などであるとよくいわれてきたが、僕はそれを軽視していた。それはよくないことであり、危険なこと（フ

---

て、とりあえず、社会（支配階級）が個人に法律・教育・メディア等を通じて内面化する規範・基準、したがってより社会的な装いをもったものを「道徳」とし、それに対して各個人がもっている自分の生き方を律する規範を「倫理」と大枠で区別しておく。

17) 池田晶子[2001]p24

ァシズム的利用や差別的感情)であり、愚かで劣ったことであるとしていた。だが、  
事実は、理屈を操る学者にしてもその根本には自分の実存や直感がある(偏差値が高い  
人で人権意識の低い差別主義者はいくらでもいる)。古くはそれを「立場性・党派  
性・階級性」という概念で示そうとしていたことにかかわるところの、身体が存在す  
る場所や体験の重要性の問題。今日、そうした視点は忘れられがちであるが、どの  
ような場所に住み、どのような人と交流し、どのような生活体験を持ち、何に利害関係  
をもち、どのような人の痛みのそばにいるかで、その人の認識は変わる。理性だけで  
は人は動かないという事実を、僕は「混沌の闇世界」の領域を確認することで、従来  
の「立場性や身体性」の概念と結びつけてははっきりと理解できるようになった。

歌声のパワー。人といっしょに何かをやること。一緒の時間を過ごすこと。体を動  
かすこと。抱きしめること。絵をかくこと。セックスすること。そういうことの力を  
見直すことができるのも、「混沌の闇世界」概念によってである。口先だけの人を嫌  
と思う感性がある。偉そうな物言いやけんか腰の人、否定的エネルギーを自覚なくま  
き散らす人を嫌悪する感性がある。それにたいして、ジミー大西さんやCoccoさん  
のとつとつとした話しかたに本物さをみる。沈黙の力というものもある。

そもそも僕が大好きな「映画の力」とは、「混沌の闇世界」の力だと捉えれば胸に  
すんと落ちる。音楽も絵画も小説もすべて「芸術の力」たるものは、「混沌の闇世  
界」のエネルギーが、「論理」を越えた「形式」で表出したものと捉えることができ  
る。

人間を見ていれば滑稽であり、おぞましい(面がある)。情念、残虐さ、愚かさが  
あふれ、戦争も競争もやめることができない。しかし、それを一刀両断に切り捨てて  
何が言えるというのだろうか。例えば戦争というひどいものの中にみられる人間ドラマ。  
敵であれ味方であれ、一人の人間を深く書き込めば、そこには単純なレッテルには収  
まりきれない複雑性が浮かび上がり、敵・味方や善悪を越えた両面の統合体がみえて  
くる。僕等がひきつけられ、笑い、泣き、共感するのは、そうした人間の多面性の底  
に横たわる「混沌の闇世界」のエネルギーを感じているからではないだろうか。そう  
捉えることで、僕は、単純な正義や善の限界を意識した後でも、逆に単純な悪やあき  
らめに振れるのでなく、新たな“希望”をもてたようにおもう。

言葉にしてもそうだ。日常の表面的言語や客観的といわれる学問言語だけだと、空虚さを感じてしまう。平板すぎて、多重構造になっていない感じで、ドキドキもウキウキもできない。想像力がかきたてられない。だが、「混沌の闇世界」に関わる表現に出会うと、言葉に力が宿る。芸術的言葉には感動を覚える。

そもそも、言葉の意味は、どこで捉えるのか。視角や味覚など五感で捉えるものじゃない。五感を超えた多様な感覚の総合性で、捉えるのだ。その意味で、五感だけが確実に、第六感的なもの＝「混沌の闇世界」は非合理と切り捨てるような安易さが愚かだ。リアルな現実全体、その瞬間瞬間のすべては、科学で分かっていることと同じではない。五感で捉えられるものが全てではない。真善美というような、人間を強く動かす理念もある。

テレビのわかったようにコメントする人や学者の死んだ声にはうんざりする。芸術批評とか映画評の多くは嫌だなーと感じる。なんか小理屈をつけて、分かった気になっているが、ほんとにそれだけか、全然分かってねーなといつも思う。言葉の表層水準とは異なる豊穡な世界があるのにそれがわからずに、単純で表層的で学問的な言葉できれいに「分析」して見せて、お約束の範囲で納得するようなのは、気持ち悪いし、違うなーと感じる。「ワインのうんちくを語る」ような感じ。だが、僕は目をつぶってワインを口とのどに触れさせ味わい、目をあけて「おいしいね」と微笑みあいたいのだ。映画館を出たとき、まぶしさを手をかざすように、まわりついてくる日常世界の時間の流れを拒否の姿勢で振りほどき、ふらふらと異空間を漂いたいのだ。それが「混沌の闇世界」のエネルギーを視野に入れた姿勢。

言葉・情報・学問・常識というような、自分の外部にすでに権威づけられた、巨大なものがあることは、悲しいし、危険だ。それをもつことで、一人一人の「混沌の闇世界」からの認識が限定されてしまうからだ。表層の言葉や情報が、それ以外のチャンネルで感受する能力を奪っているのである。卑近な例でいえば、ガイドブックやガイドさんのお話があることで、僕らは、そのようにその観光地を理解してしまう。スケジュールに沿って、計画どおりにみてまわり、感想文は誰が書こうと似たものになってしまう。

だがそれがないとき、そして感性を開くとき、感想は多様になる。目をつむれば、

風の感触やにおいも感じられる。発見は一人一人異なる。表層の横に横たわる「目盛りの間という無限」に触れることができる。

人間関係でも、絶対に「知らない」とか、「すみませんでした」「私が間違っていました」と言えない人は、からだが表層世界的な頭によってカタクなくなってしまっているのだ。自分のコントロールできる領域や理性の限界を認めて、「あるべき自分像」に縛られていることを自覚して、「混沌の闇世界」に視野を広げれば、自分がたいした奴でなく失敗してもいいのだということがわかる。

### 単純な表層的把握から複雑で繊細な把握へ

拙稿[2003a]で自己分析したように、僕自身が、デキスギ君でまじめちゃん、理屈屋さんでカタすぎた。つまり「理性的・左翼的」すぎた<sup>18)</sup>。そしてそれは「男性的」すぎた。「感情的で小さなことは、たいして重要ではない」と、僕も含めた左翼的・男性的な者たちは、私生活の繊細な水準（私的なこと、身近な場での権力関係、感情）と「大きな物語（政治、経済、革命、天下国家、理論、学問）」を切断して平気だった。それは、理性信仰・善悪二元論にもとづく大雑把過ぎるスタイルであり、「混沌の闇世界」がみえていないところに根源性がある問題だと、いまなら思う。

「修正主義だ」、「実存主義だ」、「社民主義だ」、「反動だ」、「ファシストだ」というようなレッテルを貼って批判しきった気になるような権威主義的愚かさ。そもそも声高に批判するというスタイル自体の、自省なさという愚かさ。理性は大事だが、本当に何かを生み出したり伝えたいと思うなら、出来合いのパターンで考えず、「混沌の闇世界」を射程に入れて、相手の中の微妙な特徴や変化に感应し、相互作用のなかで立ち上がるその複雑性を感じ受けるような、コミュニケーション能力がいると思う。つまり、相手を力でねじ伏せたり、こっちの結論を飲み込ませたりするのでなく、受け

---

18) 僕は今でも「左」的＝人権擁護派だし、おろかな右翼の勢力や市場原理主義者に対しては左翼的スタンスを選択するのは僕にとっては当然である。だけど、ここでは「左翼・マルクス主義」がもっていた敵の絶対否定、自己の無謬性信仰、前衛党的傲慢さ、理性一辺倒主義、官僚主義などの危険性と鈍感さを反省して言及している。そして後述するように、右左、革新と保守の双方の近代主義的機械論的限界を批判するのが、〈スピ・シン生義〉の主目的のひとつであり、その意味で僕は「左」ではない。

取り方を開いておき、そこをコントロールしない姿勢が大事なのだ。自分も出来合いの結論に行かないような未知な世界へ常に開いていくこと。自分の権力性に本当に敏感になって、「言い切ったり自信ありげに批判したりすること」を止めること。そういうスタイルが、〈自由〉であると、「混沌の闇世界」を自覚し、いま、思う。

「理屈はどこにでもつく」ということ、「 $A \Rightarrow B$ 」とは必ずしもいえない（いえると思っているときに、隠れた前提がある）ということがわかっていない人が多いことが、実は一番恐ろしい。「現実主義」という愚かさの多くは、ここに関わっている。「混沌の闇世界」のエネルギーを自覚しないまま、それに操られて自分を「唯一絶対の正解者」と思うような理性信仰者がヤバイ。相手がなぜそんなことを言うのか。なぜ自分はそう思うのか。なぜそのような存在であるのか。そこを相対化し、自他の「混沌の闇世界」の奥深さに常に注意を向けておくことが必要だ。

そもそも、コミュニケーションということ自体が完全でなく、危うい不確定なものの上に成り立っている。恋人の言葉を聞いても、分かった気になっているだけだ。完璧には分からない。その中で、僕は他者と関わっている。想像力なしに生きられない。自分の想像力をどこまで伸ばしたか。「混沌の闇世界」を含めた総合性が問われる。「見えにくい世界」への想像力がないことこそが、問題だと思う。

### 3 それは「ある」のか、存在を証明できるのか

#### よくある誤解

〈たましい〉などというと、そんなものはあるのか（あるのか／ないのか）という点ですぐに問題が設定される。また宗教的な意味で「信じる／信じない」の話ではないのに、すぐそれと置き換えて「信仰でしかないのでは？」「いかがわしいもの」とお決まりの反応をするのが大方の反応である。科学的・狭義合理的に存在が証明されなくてはならない、そうでないと「ないのだ」「価値ない」ということになる。皆が信じ込んでいる。物理や化学や数字で、定量化・記号化されたり物的実体として証明されないと、それは「存在している」ことにならないと決めつけて思考停止している<sup>19)</sup>。愚かなことだ。論理的に説明がつくということと、全体を掴む、真実を知るに

19) そこにつけこんで、宗教でもニューエイジ系でも、カルト的インチキ商売でも、「科学で証明された」というようなスタイルで、自説の正当性を示そうとするいいかげんな

至るということとは、同じではないのに。

一方で、「魂」的なものは、「死後の世界」に存在するような、気体のような何かしら物的存在のイメージで捉えられている。死者の体からすーっと抜け出る気体のような、霞かすみのような、何かのかたまりというイメージ。写真に写る影のようなイメージ。前世や来世にも存在する、永遠の存在で輪廻転生の主体というイメージ<sup>20)</sup>。そうであるから、「あるか、ないか」という反応自体が、「ない」という結論を前提として含み、「信じる人はおめでたい」として馬鹿にしているのである。先に結論ありきである。

しかし、まず、いかがわしいカルト的な輩が用いる、気体のような、死後の世界にも存続しつづけるものとしての「魂」など、ない、と言い切っておく。そんなことを言いたいのではない。それをはっきりさせた上で考えているのだということを理解してほしい。迷信・オカルト的な、人を怖がらせ、科学的思考を否定し、民衆を操る道具になってきた、レベルの低い「靈魂」「魂」像はまず排除されなくてはならない。そんなつまらないことに時間もページも割いてられない。

### 存在するとは何か

その上で言うのだが、よく考えてみてほしい。歴史上、おびただしく、「魂」という言葉（やそれに似たこと）が発せられてきたことは何を意味するのか。そもそも、その他のあらゆる「確かな存在」（とおもえるもの）自体が、よく考えると不確かなものでしかないではないか（「混沌の闇世界」の議論を思い出して）。「存在」するとはどういうことか、よく考えるとわからないのである。「愛」とか「人間」とか「善」とか「美」とか「真実」とか「精神」とか「主体」とか「アイデンティティ」とか「国」とは何なのか。「所有」とは何で、「生命」とは何で、その出発点は一体なんなのか。それは存在しているのか。それは科学的に数値や実験で証明できるのか。合理的に説明のつくものなのか。

「不在」や「無」に至っては、考えたり認識すること自体も難しい。触れえない、

---

ものが数多くある。

20) 「この世に、私たちががからだを持って生まれる前から、私たちの魂はすでに存在していた。私たちの魂は、過去にも何度も繰り返しこの世を生きることがあって、その時にいろんな知恵や記憶や能力を身につけていた」というような俗説がしばしば見受けられる。

見えないものは、非在ともいえるし、「ある」ともいえる。「見える」ということも不思議だ<sup>21)</sup>。宇宙のことがよく分かっていないのに宇宙に住み、生命の事がよくわかっていないのに、僕らは生きている。全ての一番の根底（第一の原理）は怪しい。生死や、自分が存在し宇宙が存在するという事実自体が神秘であり、そのこと自体が非論理である。足元に穴があいているという感覚はまったく正しい。したがって、話は戻る。狭義合理で認識できないものが、「ない」ということにはならない<sup>22)</sup>。

### 「ある」から語っている

見渡せば僕らの生活(人間の歴史全体)に「魂」の類の言葉はしっかりと棲みついている<sup>23)</sup>。そして、「善」だとか、「崇高なるもの」といえば、それはやはりなんとなく「通じる」ではないか。それを「ない」というのは実は「理屈」にすぎない。「信じる」前に、その言葉を発して考え、話しているということは、私たちの概念として、“それ”は存在しているのだ。名前やイメージがあるのに、「“それ”は“ない”」といえることのほうが、考えれば不思議だ。ある名称のものがあって、他者がその名称から似たものを類推するとか伝わるというのは、その他者と私の間に共通した何かがあるからであろう。

だから、“それ”が、何かはよくはわからないとしても、まず「ある」のである。

- 
- 21) 「見えること」は、もちろん、科学で解明されてきている。受精卵から生物ができる過程で、ものをみる仕組みはどのようにできるのかが、解明されつつあるが、それにしてもその精巧で複雑な仕組みは脅威だ。10秒前の外界の状況をぼやーとしたピンボケ写真のように静止画像でなんとなくつかめるといならわかるが、瞬時に、入ってくる光の情報を像としてかなり性格に結び、それをずっと動的に、さしたる努力も集中力もなく認識しつづけるということの不思議。すごさ。そしてそれを記憶していくというすごい容量のメモリー。そしてもちろん、皮膚で感じるのと同じく、視覚も一つの認識なのだから、見えるということの限界もまた明らかだ。見えていても見えないものがあるし、見えなくても「ある」ものはある。見えていると思っているものは、ある一面でしかない。
- 22) 「理屈で理解できないものは“存在しない”とすることによって、理屈で理解できないものへの感受性を失ったことも忘れてるのが、現代人だろう」池田[1999] p 114。
- 23) 例えば、新聞にも「魂」という言葉が当然のように日々使われている。「入魂」「戦争で亡くなっていった人たちの魂を、私なりに子どもたちに語る」「沖縄の魂を歌いつづける」というような表現として、毎日、目にしている。なのに、正面から語ると、宗教だ、非科学だとレッテルを貼られ、排除される。

さらに考えると、言葉ができるまえに、そのものが「ある」という場合もあるのだが、言葉と同時に出現してしまうこともあるし、少なくとも、「考えたり語ったりする、言葉となる」と存在してしまうという関係がある。深く「ある／ない」ということを考えてきた人にとって、「存在」「ある」ということは、そういうことである<sup>24)</sup>。

マンゴの味、イカの刺身の味は、言葉では表しにくい。その人その人で感じ方も違う。マンゴやイカによっても味が違うし、味わう側の状況にもよる。食べたことのない人にはわかりにくい。だが、客観的にみて、どうみてもリンゴと区別されるマンゴ独特の味（の範囲、領域）はある。曖昧だが、確実に、マンゴの味の領域というものがあつた。概念として区別される。食べたことのある人には、その味はリアルなものとして感じられる。だからその「マンゴの味」というものはあつた。

〈たましい〉もそれと同じである。感情とも、知性とも異なる、何か“そのようなもの”があつた。あいまいだが、区別される。それを感じていない人にはわかりにくいものであるが、感じたことがある人にはわかるものである。だからそれに名前を付けた。名をつけることで、感情でも知性でもない、心の奥の方のきれいな部分が作動する大体の領域を示せる。それが〈たましい〉である。だからその概念は、ある種の、「人間の作り物」、フィクション、概念であり、「幻想」であるといえるが、そういうものとして「ある」のである。「ない」のではない。

よく分からない何か心の奥にぐっとくるものが「ある」ということ、それが「ある」ということまでは感じられ、また考えられる。が、それが何であるかは、言葉や合理的な認識方法(物理的測定、科学的アプローチ)ではうまくつかめない(認識できない)ということがあつた。科学的に認識できないから「ない」などというなら、過去には原子もDNAも冥王星もなかつたことになるし、日本人にとってアフリカ大陸はなかつたということになる。宇宙の果て近くは認識できないが、では宇宙の果てはないといえるかということとなつたことはいえない。ではどうなつてゐるのか。分からないから、宇宙も地球も太陽もないのか、あつたのか。もちろんあつた。そういうことである。

「マンゴの味」は科学的な分析によって示せるというかもしれないが、分子や物質

---

24) 池田晶子さんは、こうしたことを現代日本でもっとも考え分かりやすく語つてゐるひとりである。

名を示すことが「味」の全てではない。ワインの味、酢のすっぱさといっても千差万別である。個人差によっても体調によっても異なる。「どう感じるか」というその全てを化学的物質名で示すことはできない。その総体は感じざるを得ないものである。

まずは、「ない」と決めつけ、そしてそれは「信仰だ、迷信だ」と鼻で笑って思考停止してすむと思ひ、そしてこれまでの人生でそういうことに真剣に思いをはせてこなかった自分(の感覚)を絶対だ・不変だとしているような自分の不明さを恥じるべきだろう。支配階級や近代社会に内面から支配されてきたことを相対化して批判的に自覚するというなら、封建的迷信だけでなく、まさに現代の「迷信」(=自分の近代的主観・科学信仰)にも思考の刃<sup>やいば</sup>を向けるべきであろう。宗教や魂を真剣に語る人の、その真摯な姿勢や崇高さに感じる感受能力がないことに恥じ入るべきだろう。しかし、多くの人は、近代社会・近代意識の相対化などほとんどできていない。

#### 〈たましい〉を感じるのだから、あるのだ

「混沌の闇世界」の概念を提起したところで強調したように、僕がココで考えたことは、「私はそんなにすべてを分かっているのか。理性で考えることや自覚していることがすべてか」ということであった。そうではないというところから、全てはわかり始めた。感覚と思考が接近してきた。認識が広がった。「理性的なものは神秘的である」(ヘーゲル)。「無意識」は「ある」のではないのか。「虚数」や「虚無」は「ある」のではないのか。「考える」とは何か。A=Aなら何も考えていない。A=Bというなら、それは飛躍ではないのか。AだからBというような「論理的説明や証明」は、よく考えるとあやふやなものであった。二分法や論理的科学的に説明や証明ができるという近代主義的なパラダイムの限界・限定性を理解していなくてはならない。

例えば、無意識は、私の意識を超えて体や感情が示したり、私の行動に影響を与えることで出現する。というか、その「存在」が間接的にわかる。〈たましい〉も無意識の領域のものなのだから、そりゃわかりにくい。しかし、多くの人が言及し、僕も“それ”を感じ、さらに、これが「ある」と仮定すると、ほかのことがかなりうまく説明される。したがって、僕が「ある」と思っても、言ってもいい。〈スピ・シン主義〉の主張全体を通じて、僕は、自分が〈たましい〉を感じているということを伝えたいとおもう。「気配」<sup>けはい</sup>とも言うべき繊細な感覚を大事にしたいとおもう。「感じ」

「気配」「肉感的感覚」「感動」ということを無視・軽視していいとあなたは僕に説得できるか（できないよ）。〈スピ・シン主義〉で僕が書くことをあなたが共感・同意するということがあるとすれば、〈たましい〉があるとあなたも感じているということである。認識の基底には、「感じる」ということがありと池田氏はいう<sup>25)</sup>。僕もそうだとおもう。

私は確かに脳で考えている。しかし、脳のことはすべて分かるか。なぜ私は、このようなことやあのようなことを考えたり感じたりするのか。他の人とのこの差異は何か。何かうまくいえないけど、僕にはいろんなものが感じられる。何か、直感的にこの人は信じられるとか、胡散臭いとか、みえるものがある。その人の瞳や声の調子に、嘘はないと感じる。ある人の勇氣のようなきれいなものに感動する。その感覚や人との差異はどこからくるのか。

すべてそれは僕の脳の科学的な機能の働きだけか。遺伝情報と私の努力と生育過程でインプットされた情報だけの問題か。〈たましい〉を感じない人と脳の構造上で、違いを見つけることは難しい。そこには、どうも分からないところがあり、多分、自分の脳の狭義の生理的機能を越えたものが関わっている気がする。無限に考えられるということのすごさ。それが、「精神」という領域の特徴であり、そこでは長い歴史を踏まえた、この「生命」(全体)に宿るとてつもない能力の可能性(潜在性)が感じられるし、その無限の思考には宇宙を感じる。遺伝子も含めて、僕は、この小さな個体の努力などを超えて、大きなつながりの中で生きているし、その結果、何か未知のものに触れながら生きている気がする。そのつながっている全体を「大きなくたましい」という概念でとりあえず捉える<sup>26)</sup>。そういうものとして僕には、それは「ある」のである。

### コミュニケーション

また、人間関係の理解においても、見えていることだけがすべてでないという観点から、〈たましい〉の視点の重要性を僕は思う。人は実は、別々の「世界」に生きている。同じ地球上で同じ一般環境で生きてはいるが、自分独自の環境があり経験があ

---

25) 池田[1999]p51-52,p94 など。

26) 「人間はどこまで考えられるのか。果てまで考える人間は、それ自身、宇宙である」と池田氏は言う。私は、同時に宇宙である。

り、自分の〈たましい〉を通じて世界をみて感じている。誰一人、「AさんとBさんは同じ」という存在は、ない。結果、見えているものも感じているものも同じというわけではない<sup>27)</sup>。使っている言葉の理解も人ごとに異なる。だから私は他者を完全には理解できない。他者を、したがって世界全体を完全に理解することなどできないということを理解することによって、私たちの関係、態度は変わらざるを得ない。他人のことは分からないという謙虚さが、それでもその人の全体を感じ、コミュニケーションしたいという思いとなって、その人を〈たましい〉として認識する、その人の〈たましい〉に耳をすますというコミュニケーションのとり方となる。そういうものとして、〈たましい〉は、ある。

さらに、人間以外の存在（と／どうし）のコミュニケーションがないといえるだろうか。いえるはずがない。動物もコミュニケーションしているという見方をするなら、言葉を通じてのみ、あるいは「高度」な人間の頭脳をもってのみ、コミュニケーションしているということへの疑問も浮かぶ。相手がどう理解しているか、何が伝わったのかは、人間どうしでも完全には分からない。しかし、ある程度伝わっていることは、総合的に認識すれば分かる。言葉を越えて、「伝わるもの」を感じる時、〈たましい〉はみえる。

### 幻想という実在

だから〈たましい〉とは、サンマのアタマの「信心」の問題でなく、「大事な」ことを考えたいがための、非物的実在のことなのだ。僕は、それを「幻想」だとは自覚している。他の多くがそうであるように、〈たましい〉という概念もまた、幻想だ。人間が、僕が、言葉を使って作り上げたフィクションだ。そして国家や貨幣や神や科学や家族といった「幻想」は、私たちが共同で持っている幻想であるがゆえに、人間社会に強力に作用する「実在」であるように、〈たましい〉もまた、そのような実在である。そして、生き方や社会運動のあり方を考えるために、僕にとって〈たましい〉という「幻想」を踏まえた〈スピ・シン主義〉という「物語」を書くことが必要であるということなのである。人はみな、自分の物語を書く。論理の説明があっても、そ

---

27) 「哲学とか学説というのは、その人の〈たましい〉という鏡に映った限りでの、宇宙のひとつの姿にすぎないのだ」池田[1999]p103

れは部分である。全体の納得とはまた別である。客観主義の狭義「学問」は、乗り越えられるべき領域を多くもつ。

「きれいな心」「自分を高める」というとなんとなくわかるじゃないか。貨幣的価値に満足できず、「何のために生きるのか」と根源的に問う人があるではないか。つまり「わかっている」のだ。それが「ある」ことを。本質的な意味で「豊かな世界」の中であって、論理的に考えられないが存在する〈たましい〉を感受することはできる。狭義の合理主義ではとらえがたい〈たましい〉の感覚を大切にしたいとするのが〈スピリチュアリティ〉の視点である。〈スピリチュアリティ〉視点は、現代人の多くが認めない〈たましい〉の存在を認め、そこから考えていこうとする意志である。「愚かな人の妄想」ではなく、カルトでも宗教でもなく、希望として語れる「生きる意味」としての、人間が作り上げた豊かな幻想概念である。

#### 文 献

- 池田晶子[1999]『魂を考える』法蔵館  
 池田晶子編著[2001]『2001年哲学の旅』新潮社  
 伊田広行[1999]「スピリチュアル・シングル——生き方と新しい社会運動の新しい原理を求めて——」『大阪経大論集』50巻第1-3号  
 ——[2000]「新しい水準の人権概念を創設しよう」『職場の人権』3号  
 ——[2003a]「〈ぎりぎり〉の実践へ——自分の振り返りと現在とこれから」『大阪経大論集』53巻第5号  
 ——[2003b]「新しい社会運動の模索——〈スピ・シン主義〉視点からの考察」『大阪経大論集』53巻第5号  
 ——[2003c]『〈スピリチュアル・シングル主義〉』（仮題：明石書店2003年春出版予定）  
 京極夏彦 [1996]『絡新婦の理』講談社  
 栗本慎一郎[1985]『鉄の処女——血も凍る「現代思想」の総批評』光文社  
 ル＝グイン (Ursula K. Le Guin) [78]『闇の左手』ハヤカワ文庫 (The Left Hand Of Darkness, 1969)  
 宮台真司・速水由紀子[2000]『サイファ覚醒せよ!』筑摩書房  
 中島義道[1996]『「時間」を哲学する』講談社現代新書  
 大庭・安彦・永井[2000]『なぜ悪いことをしてはいけないのか』ナカニシヤ出版  
 鷺田小彌太[1993]『現代思想キイ・ワード辞典』三一新書